

流産手術（子宮内容除去術）

<目的>

流産の診断後、子宮内に残っている妊娠組織を除去し、出血、疼痛、感染などの合併症を予防します。

<方法>

静脈麻酔下に子宮口を拡張し、子宮内容を手動真空吸引法（MVA法）で除去します。

<危険性・合併症>

1. 出血：術中、術後には、出血を認めることがあります。
2. 感染：術後、子宮内や腹腔への感染（子宮内膜炎、骨盤腹膜炎など）により発熱、腹痛等を認める可能性があります。抗生剤の投与や入院治療を要することがあります。
3. 子宮頸管損傷：子宮内容を排出する前に子宮口を拡げる処置を行いますが、その際に子宮頸管が損傷し、出血をおこし、止血処置が必要となることがあります。
4. 子宮穿孔：子宮の状態により偶発的に子宮に穴があく可能性があります。他の臓器の損傷の可能性もあるため、入院や開腹術が必要となることがあります。
5. 子宮内容遺残（RPOC）：子宮内容は可能な限り取り除きますが、絨毛組織などの妊娠成分の一部が子宮内に残存することがあります。経過観察、ホルモン剤、あるいは再手術を要することもあります。
6. 子宮内癒着：術後、子宮内が癒着することがあります。癒着剥離術やホルモン剤投与などの治療を要することがあります。
7. 麻酔：通常の麻酔と同様のリスク（血圧低下、徐脈、アレルギーなど）があります。

<代替手段>

状況により自然排出を待てることもありますが、排出時期は予測できず、疼痛や出血が長く続くことがあります。

薬剤により排出を促す方法もありますが、国内で承認されている薬剤はありません。

<その他>

手術で得られた検体は病理組織診に提出します。

流産を繰り返している場合は、別途、絨毛染色体検査について説明します。

ご不明な点があればご遠慮なく医師・看護師にお尋ね下さい。